

ライブ「TULIP 50周年記念ツアー
“the TULIP”アンコール公演」
(2024・7・19 福岡サンパレス)



大ヒット曲「心の旅」がラジオから流れていた頃、私は幼稚園児だった。兄達がパジャマ姿でラジオを膝の上に置き、声を揃えてサビの部分を楽しそうに歌っているのを見たのが、私にとってのTULIP原体験である。十代の頃「おじいさんになっても歌い続けてください」などと、失礼なファンレターを出した。それが実現するなんて……。

ツアー最終日の観客はほぼ五十代以上。思春期からの愛唱歌はイントロを聴くだけでも飛び跳ねたくなる。満場の二千数百人が立ち上がり、ギターのストロークに合わせる複雑な手拍子も難なくこなす。年季の入った、厚みを感じさせる財津和夫の歌声が心地よい。

昔のコンサートとの違いはただ一つ。「夢中さ君に」の合いの手コール「ざいつさんっ！」が若い女性ファン達の黄色い声から私達の茶色い声に変わり、大勢の隠れ男性ファンの、非常に野太く黒っぽい「ざいつさん！」が新たに加わったこと。「財津さん」は七十六歳。皆アドレナリン全開、永遠の「私のアイドル」だ。
(久保田智栄子)

浅田次郎著『母の待つ里』
(新潮社)



稀代のベストセラー作家の最新作（単行本は2020年1月刊、文庫は2024年8月刊）。今さらという気もあつたが、近所の書店で目にしたので思わず購入した。

題名の「母の待つ里」は、雪深い東北のある村がモデルとなっている。登場人物は数人しかいない。松永徹（創業百三十年の加工品会社社長）とその母・ちよ、室田精一、女医・古賀夏生^{なつお}、田村健太郎、秋山光夫、何度か登場する曹洞宗慈恩院の住職。またヘナイテッドカード・プレミアムクラブなる会社の登場により、幻想のような鄙びた村が現実味のある土地として伝わってくる。

大企業の社長でありながら孤独を抱える松永、退職後に熟年離婚の当事者になってしまふ室田、母の介護と看取りを終えた古賀。物語の謎を解く人物として登場する居酒屋チェーンの経営者・田村の存在も重要である。

東北地方の方言による会話体を駆使した浅田次郎の文章は、エンターテインメントの魅力を満喫させるエネルギーに満ちて、飽きさせない。
(丹波真人)